

1	言葉
言葉の力をつけよう（音読3年⑤） 〔日記文学の代表作「更級日記」〕	
名前	

★ 平安時代には、日々の記録が目的ではない、自己の内面を見つめる性質をもった文学性の高い日記文学が生まれました。その中の一つが菅原孝標の女（娘）が書いた「更級日記」です。

やってみよう

◆ 筆者の菅原孝標の女（娘）は平安時代の中流受領階級（地方官僚）を父親にもつ女性です。彼女は晩年に自分の人生を振り返ってこの日記を書きました。

《解説》

東国地方の田舎で生まれ育った菅原孝標の女は、都で話題になっている「源氏物語」をはじめとする物語を、あるだけ読みたいと、薬師仏を作って一生懸命祈ります。やがて、国司の任を終えた父親に伴われ、京の都に帰ることになりました。



《読んだ回数》

あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひいでたる人、いかにばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじくこころもとなきままに、等身に薬師仏を作りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、京にとくあげたまひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せたまへと、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。

朗読

暗唱

合計回

何度も

5回

4回

3回

2回

1回